

「春眠不觉晓」(春眠晓を覚えず)

孟浩然

『春晓』 春眠不觉晓 处处闻啼鸟 夜来风雨声 花落知多少

〈書き下し文〉 春眠晓を覚えず 处处啼鳥を聞く

(しゅんみんあかつきをおぼえず しよしよていちようをきく

夜来风雨の声 花落つること知る多少

やらいふううのこえ はなおつることたしょう)

〈現代語訳〉 春はぐっすり眠れるものだから、夜が明けたのに気づかず寝過ぎしてしまった。あちらこちらから鳥の鳴き声が聞こえる。

昨夜は、風や雨の音がしていたが、花はどれくらい落ちてしまっただろう。



「春眠晓を覚えず」といえば「春の寝坊」を思い浮かべて例えに使うこともありますが、まれに「寝坊は誤用」だとする説もあるようです。「春眠晓を覚えず」(しゅんみんあかつきをおぼえず)の意味は、「春はぐっすり眠れるものだから、夜が明けたのに気づかず寝過ぎしてしまう」という訳が本当の意味です。

その他の説として「春眠晓を覚えず」は、「春の夜は短い」という意味で「寝坊してしまう」という意味はない、という説などがあるようですが、刊行されている辞書や漢文を紹介する出版物では「寝坊してしまう」という意味の訳がとられています。ただし、「春の夜は短い」うえにぐっすり眠れる」というように「春の夜は短い」という意味を付け加える訳文はあります。また、「寝坊してしまう」の他に「なかなか起きることができない」「なかなか目が覚めない」などの表現の訳文があります。いずれにしても、「春眠晓を覚えず」は、春の心地よい朝寝坊をうたった詩であることは間違いありません。

「春眠晓を覚えず」を詠んだのは「孟浩然(もう こうねん)」という中国唐代の詩人です。出世欲がなく、各地を放浪しながら歌を詠んだ人のようです。孟の生きた古代中国の役人は朝が早く、厳しい規律に縛られていました。そのような世俗の生活を揶揄して詠んだ歌なのかもしれません。鳥の声や春の嵐の様子、そして花など、自然の描写が巧みに織り込まれ、うららかな「春の朝」の様子が春の匂いとともに伝わってくるようです。この「春眠晓を覚えず」の歌は、うららかな春の気分の歌です。忙しい毎日の現代人とはいえ、季節を楽しむ感性を忘れないようにしたいものです。

